

# みめじみの

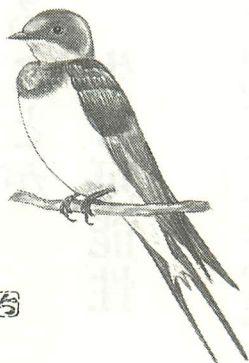
第12部





# みめじみの

## 第12部



吉

大谷光道著

### 目次

信じることが生む可能性……	2
イメージ……	3
歌を歌う……	7
木の中に仏さまがおいでになる……	10
やる気を起こさせる「何か」……	13
私でなければ……	15
不完全だけれど最高……	17
お念仏を独り占めに していませんか？……	20
犬でも……	22
自信教人信……	24
穴があつたら入りたい……	26
必ずできることがある……	29
あとがき……	31

# 信じることが

## 生む可能性

あげましておめでとございます。

ただ今は過分のご紹介をいただきまして、恐縮しております。

一年余り前に中小企業家同友会の西神戸支部からお声がかかって、「元氣」と題してお話をさせていただいてから、

こちらのほうにはいろんなご縁を頂戴するようになりました。今日は神戸市インナー第四工業団地の皆様の新年会で、是非話をするようにということ



す。はたしてご期待に沿えるかどうか心配ですが、思うところを少しお話し  
たいと思います。

## イメージ

仕事柄、時々「書」を頼まれることがあります。書というのは額にするとかあるいは掛軸にするとか、後々残って晴れがましいことになるものです。そこでつい「何とか上手な字が書きたい。」とだけ思ってしまう。しかしながら、これではなんの具体性もなくまことにぼんやりした欲求で、その本心は実は「ええ格好がしたい。」というだけのことなんだと気付くのみです。

代わりに書いてくれる人がいるわけもなく、やむなく重い腰を上げて、書くべき字とその配置を頭の中で積んだり崩したりし始めます。くずし字の字典をひっくり返ししながら試行錯誤を繰り返しているうちに、ありがたいこと

に「この字はこのように書きたい、こうでなければならぬ」というものが、だんだんとはっきりそのイメージを現すようになります。こうなって、やっとその時点での私としての一つの確信が持てたという状態になります。

父——先代です、八年前に亡くなりました——が元気な頃、やはり「書」を頼まれて、それもいつも書きなれている字であれば時間はかからないのですが、特別なのを頼まれると形になるまでにずいぶん時間がかかりました。

一ヶ月、二ヶ月と経つても中々出来上がらないので、私は頼んだ方にせかされはしないかとやきもきして、恐る恐る「そろそろ、どうでしょうか。」って言う、「うん、いまその構想を練ってるのや。」と言われてしまします。こんなこと言っではいけないんですが、「適当に書いといたらええのに……」(笑)と内心思うこともありました。

やはりイメージがないと書けないということなんです。逆に言うとそのイメージができてしまうとすぐに出来上がってしまう。こういうことを父が

言ってたんだ、と今になって思います。

それと私が恵まれているのは、書道を教えてくださっている先生がたいへん寛大なお方であるということです。習い始める前は、先生のお手本に少しでも近付けるようにだけ稽古するのがお習字だと勝手に思っていました。ところが、「これは参考ですよ。」と言って——要はお手本なんです——書いては下さるんですが、できるだけ私の書こうとするものを尊重して、どういう字にしようかといろいろ形を考えていく私を手伝うような立場で、アドバイスをしてくださいます。そのお陰で、以前よりはだいぶ字を書くのが好きになった、とまでは言えなくても、苦にはならなくなりました。

こう言うと、私がすばらしい書のセンスを持ち合わせているように聞こえるでしょ。それはとんでもない誤解で、ただ何でもいいから「変わったこと」がしたいだけなんです。厄介な弟子だと思えますよ（笑）。こういう弟子を受け入れながら指導して下さる奥の深さにいつも敬服しています。

いずれにしても、イメージを作つていくことの大事さが痛感されます。長くお習字をやつてきたわけでもない私が言うのは身の程知らずの謗そしりを受けますが、「お手本を見ながら白い紙にそれを写すのではなく、お手本は自分の頭の中に焼き付けるべきもので、自分の頭の中にあるイメージを紙に写すことが大事だ。」と思うようになりました。いつも先生のお手本を写していると、お手本のないときに書けないということにもなります。





## 歌を歌う

最近これも仕事柄、普通に言うお経ですね、そのお経を人に教える機会が増えてきました。本当は、お経というのはお釈迦さまの説法をまとめた節のない棒読みのほうのことで、節があるほうをしょうみょう声明といいます。

声明というのは節、つまり音の高低とリズムがあるので、歌を歌うのと同じことです。ところが中には、普通の歌は歌えるのに、声明になるとなかなか身につけてくれない人がいます。これが不思議で仕方がなかったのですが、頭の中、いや体の中でしょうか、「歌わせる元」があるかないかだということとが判ってきました。何かが原因して声明のアレルギー（拒否反応）があるのかも知れません。声明のメロディーが体に染み付きにくいようです。

今まで私は無意識に歌を歌い、声明を唱えていましたが、歌というのは体の中を歌わせるものが先に走るんですね、どうも。みなさん、カラオケなど

をおやりになるでしょ。一度このことを頭においてやってみてください。みなさんを引っ張って歌わせようとするものが、先に走って行くのに気付かれるはずです。それがないと歌えないんですね。声が出ても歌にならないんですね。音が外れたり、聞いている人を吹き出させたりするのは、先に走っていくものがヨタヨタしているか（笑）、全くそれがなくて正確な音を見つけないことができない。どうもそういうことがあるんだということに最近気が付くようになりました。たいへん貴重なことを教わったものです。

母が亡くなってもう十年、いや、今年は十三回忌をやらんらん年ですが、母が元気な頃のことです。ご承知の方もおられるかもしれませんが、父と二人で『大谷楽苑』<sup>がくえん</sup>という仏教音楽中心の合唱団を主宰しておりました。本人自身も歌うことがたいへん好きでした。同じ歌でも和歌もやっておりましたが、ここでのお話は声を出して歌う、いわゆる声楽です。更年期障害の一環だったようですが、ある時声が出なくなりました。唾液が出なくなる、出る

量がうんと少なくなる症状です。

それで、医者から声を出すこと、特に歌うことを禁止されて、たいへん淋しい思いをしている様子でした。私が「声は出さなくても、楽譜を眺めるくらいいいやんか」って言ったら、「その、楽譜を見るのがいけない。楽譜を見るだけで声は出さなくても咽喉のどが歌うんで、それで咽喉に悪いと言われた。」と言うんです。楽譜に親しんでいる人は、体の中に歌の元がなくても——まだその歌を覚えていなくても——楽譜が歌わせる元になって、咽喉を動かすんですね。

「話」は歌ではありませんが、日常の会話もそうですね。今まあこうやって私のお話してありますが、ときどき下（手元）のこの虎の巻をチラチラ見ながらお話を続けております（笑）。

さらに歌や話に限らず私たちのふだんのあらゆる行動を通じて、私たちが引っ張っていくレール、ガイドというものが必ずどこかにあると言えそうで

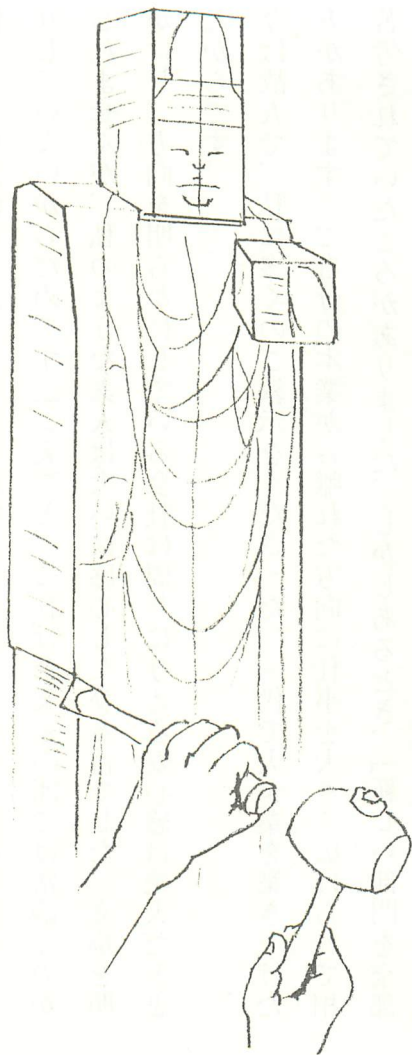
す。

## 木の中に仏さまがおいでになる

こんなこともあります。仏像彫刻家のお話です。

「私が鑿<sup>のみ</sup>で木を彫るんだけど、私が仏さまを作るものではありません。中に仏さまがおいでになるんです。私は、いらないところを取り除いて差しあげているだけです。」と。「こうでなければならぬもの」というのがちゃんとするわけですね。それが表に現れてくるようにするのが彫刻の仕事なんだというのが、実際に彫っているこの方の実感なんです。

お能というのはよく知りませんが、顔に面をつけて、あれは踊る、踊るんじゃないかって舞うっていうんですか。お能の専門家がラジオでお話されていたのを思い出します。自分が動いて舞うのではないんだって仰るんですね。「面についていくようにならないといけないんです。」こういうご説明でし



た。ですから必ず「こうでなければならぬもの」があつて、そこへ自分がついていくようにならないと本物にはならないというお話です。

ある大企業にお勤めの方が、「会社というのは、大きいとか小さいとかに關係なく、理念のしつかりした会社は伸びるんだ。ウチの会社は理念がしつかりしていないからだめです。」（笑）と。これは企業家の間では常識なのかもしれません、私のような素人は大いに感心したひと言でした。立場を明らかにし、方向を明らかにしている会社は周りに与える安心感は絶大だと思つたからです。

今は故人で、私に多くのご教示をくださった、一代で大企業を築き上げたお方があります。ご自分の本業から離れた方向に仕事を大きく広げられて相当苦労されていたころがありました。しかしあるとき、「新しい部門を全部やめて元々の商売に戻ったらうまくいくようになった。」と私に漏らしておられました。

見切りをつけることや専門の仕事に徹することも、大事な理念の一つだと  
思います。

## やる気を起こさせる「何か」

もちろんどんな場合でも、縮小すればいいというわけではありません。しかし、この場合も何か「こうでなければならなかったもの」を感じます。

「そうでなければならぬもの」について、先程の仏像彫刻の話はたいへんわかりやすい実例だと思いますが、そこに彫られるべき仏さまはおいでになるのだけでも、「彫らなければ出ておいでにならない」のだから、「必然であって必然でない」ものであり、「必然を見つけさせる何かの力」を感じずにはいられません。この必然を見つけさせる力——イメージを与え、彫る気を起こさせるもの、原動力——これはいったい何なのでしょう。

普通の人が見たらただのいっかい一塊の木切れに過ぎないのに、この彫刻家にはそ

ここに仏さまがおいでになることがわかる。すばらしいことだと思います。私は『竹取物語』が好きで、すぐ引き合いに出してしまいますが、あの翁おきなとかぐや姫の出会いを連想します。「竹の中に光るもの」はあの翁だから見えただのです。

信じられないほどすばらしいことをやってしまったとき、「あれは私ではない。私にできるはずのないことをした。誰かがそれをさせたんだ。」ということを聞くことがありますね。この彫刻家のような思いで仏さまを彫る方は、たぶん「私であって私でない。でも、私でなくてもやはり私だ。」という境地に到達されるのではないかと思います。

私たちに魅力あるイメージを与え、やる気を起こさせる力、私たち人間にははかり知ることのできない何かの力が働いていることを感じさせられます。どんなに困難であっても、真剣に取り組んだ者のみが到達することのできる境地、そうさせる「何か」については、宗教的回答しかないと思います。

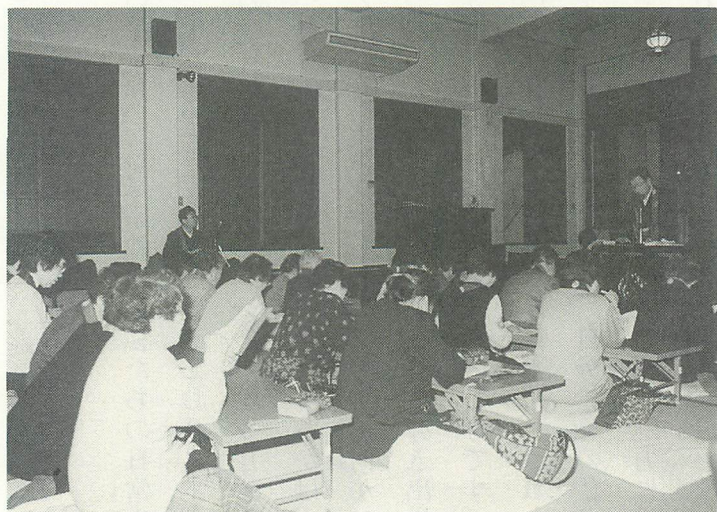


## 私でなければ……

宗教観というのは人によって違いますが、私は宗教とは私たちの日常生活はもちろん、そもそも人間の生命、生存の根源であると思っております。そうであるから当然、日常の皆様方の会社経営にもイメージを与える力となり、必ずその元となるはずであります。どういう宗教を自分の柱とするかは、それぞれご自身に合った、平たくいえば好きな宗教があるはずです。何かひとつ信仰をお持ちいただくことによって、しっかりしたイメージを導き出す原動力が生まれるはずである、こういうことを今日は申し上げたいわけです。

私のところの場合で言うと、「阿弥陀仏」という仏さまに惚ほれて、うれしさのあまり南無阿弥陀仏と称えてしまう」ということです。自分でその仏さまを無理に信じようとして信じるのではなくて、その阿弥陀さまの魅力に私のほうが惚れさせられて、引っ張られていくんだということです。

さらにいうと、やがてこの世での命が終わったら浄土——極楽です。ね——へ行けるといいう、必ず行かしてもらえるとという安心感によって、私たちが根底から確実に支えられる。これによって私たちの心は静かになり、心の視野が広がる。そして、「こうでなければならぬもの」が見えてくるのです。目に見えるものでたとえると、神戸でなら六甲山の上からだとして神戸の街を見下ろせますね。街の中にあると遠くが見えなくて見える



ご門徒を対象に声明の講習

のは向かいの家くらいですが、高いところから見るとずっと先の海のほうまで見えるようなものです。つまり、次元がひとつ上へ上がるといふことです。

## 不完全だけれど最高

ここでもう一度、はじめに引き合いに出した私の書の話を取り返らなければなりません。「その時点での私としての一つの確信が持てたという状態」のところですよ。

数年前、一度大きな紙に書いてみたいと思って、畳一枚と言えば大げさですが挑戦してみました。私なりに納得のいく書ができたので、表装して私の仕事場に掛けました。はじめのうちには来客が見てくれるとうれしい気分になっていましたが、だんだん恥ずかしく思うようになってきました。粗あらが一つ二つ見え始めたからです。

「このところはもう少し右に伸ばしたほうが良かった、このところは筆を止める必要があった、等々。日を追うに従って、気になるところがどんどん増えていきます。そうなりだして、この軸はもう片付けてしまおうか、書き直そうかなどと思うようになりました。」

しかし今では、恥ずかしいけれどそのままにしておくことにしました。そして、いつも睨にらんではより良いイメージ作りに役立てようとしています。こうでなければならなかったはずのものが、こんなにも不完全なものだったことがわかりします。でも、いつも不完全から完全に向かって努力し続けるところに、生きている私があると思えてきます。現実には、「その時点での私なりの最高」しかあり得ません。こういう過程にこそ、私で言うならば、阿弥陀さまに護られ育てられている実感があります。

「私の仕事はこうでなければならぬ」というものがどなたにでも必ずあ

り、「私でなければできない仕事」が、必ずあるはずです。そして、もつと  
言うならその仕事と私は不可分なのです——先程の仏像彫刻のように、その  
人でないと見えないイメージがあり、その人でないと彫れない仏さまがおい  
でになるのです。何かの信仰をお持ちくださることによって、お仕事の可能  
性は必ず広がると信じます。

会社の経営という真剣勝負の毎日を過ごされている皆様方に、それとは比  
べ物にならない私の書を題材にして生意気ばかり並べましたが、何かのご  
参考になればこの上もなく幸いです。

## お念仏を独り占めに

していませんか？

私たち浄土真宗の流れを汲む者は、お念仏の教えを私にまで届かせてくださった方々のご恩に報い、そのご苦勞に感謝し、そのお徳を讚歎さんだん（ほめたたえる）いたします。

今日のように報恩講は、御開山親鸞聖人へのご恩を中心に偲ぶための集まりです。

ところで、ご恩報謝の中身が、「お念仏を喜ぶこの身とやらせていただいたお礼」だけに終わってしまっているということはないでしょうか。もしそうだとすると、私だけのものとして抱え込み、お念仏を独り占めに行っている

ことになります。

私がこう言うと、「私には、とても御開山聖人や蓮如上人のような人並みはズれた方の真似はできません。考えるだけでも恐れ多いことです。」とおっしゃるかもしれません。私も基本的には同感です。

たとえが悪いかもしれませんが、人の成功を羨うらやんだり、自分ができないことの言い訳に、「(私は頭が良くないが)あなたは環境に恵まれていたからできたのだ。」とか「(私はそうでないが)あなたは環境に恵まれていたからできたのだ。」ということがありますね。つまり、無意識にはあっても、自分が何もせずに済ませるための言い逃れをしていることにはならないでしょうか。

そうではなくて、何もできない私を痛む心、「何もできない。申し訳ない。」と思う心、そういうものがこのご恩報謝の裏に備わっていることがきわめて重要だと思います。このような申し訳ないと思う心持ちがバネになって、ご恩報謝の行動が生まれてくるのではないかと思います。

何も特別に立派な事ができなくても、どんな些細な<sup>ささい</sup>ことでも必ず何かできることがあるはずで、そのことを精一杯するのがご恩報謝ではないでしょうか。御開山聖人や蓮如上人の十分の一、百分の一、いや万分の一でも「何か」ができるはずです。

犬でも……

「しかし、いったい何をすればいいのか。」とお尋ねがあるでしょう。私の家に「犬嫌いの人を犬好きにしてみよう」犬がおります。特別に人懐<sup>なつ</sup>っこい種類なので、犬嫌いを犬好きにするのはうちの犬に限ったことではないと思いますが、人間と一緒にいることを至上の喜びとしております。盲導犬に使われることがあるのはこのためではないかと思えます。どんなお客さんにも愛想を振りまいて、まったく警戒をすることなく近付いて行きます。たぶんこの姿を見ていると、犬が好きだとか嫌いだとか、言っていられなく



お念仏を独り占めにしていませんか？

なるのでしょ。う。

人間に放ってもらったボールを取りに行くのが三度の、いや二度の食事より好きで、キャッチボールなら一日中でもやめようと言いません。獵犬として役立つのも、物を取りに行くというこの種類の特性が向いているのでしょ。この愛用のボールは、いつも枕もとに置いて寝ています。ボール投げの夢でも見ているのでしょ。うか  
(笑)。

「犬嫌いを犬好きにする」の



しゆにえ  
修二会に参拝する大谷声明研修会のメンバー（奈良・東大寺）

で、「犬教」の布教師、宣教師のように思えてなりません。ここにもその「教化」を受けたお方がおられます（笑）。犬でもと言っては犬が怒るかもしれないませんが、犬でもこのように教化活動をするのです（笑）。私たちの身近にいくらでもやれることがあるはずです。犬に負けてはいられません（笑）。

## 自信教人信

「仏法嫌いの人を仏法好きにする」ことが、ご恩報謝の最たるものです。このことについて、もう少し説明しましょう。

浄土真宗では、称える念仏は信心をいただいたことに対するご恩報謝のためのもので、極楽への往生をお願いするためのものではありません。極楽への往生は、信心をいただくことによって既に決まっていますからです。

したがって、ご恩報謝のお念仏を称えるのが私たちの日常生活ということ

お念仏を独り占めにしていませんか？

になります。お念仏を称える心から滲み出るものすべてがご恩報謝の活動です。具体的には今お話してきた「仏法嫌いの人を仏法好きにする」ことで、これを「じしんきょうにんしん自信教人信」と言います。よく使う言葉なので、是非とも覚えておいてください。

漢字が並ぶだけで難しく感じるものです。でも中国ではそれが国語で、中国人は文字といえは漢字ばかり。当たり前ですがかなはありません（笑）。

意味は字のごとくで、

自ら信じ教へて人を信ぜしむ——自分が信じ、人にも教えて信じさせる。

そしてこの続きは

自信教人信

なんちゆうてんきょうにん  
難中転更難

—— 難しい中にもなお難しい。

だいひでんふけ  
大悲伝普化

—— 弥陀の大悲を伝えて人々を広く教化することは、

しんじょうほうぶつとん  
真成報仏恩

—— 真に仏恩を報ずることである。

自ら信じて人にも信じさせることはたいへん難しいが、皆を教化することは仏恩に報ずることになるといふことで、これは善導大師ぜんどうだいし（親鸞聖人が敬われた七人の高僧の中のお一人）が著された『往生礼讚』おうじょうらいさんの一節です。

### 穴があつたら入りたい

「仏法嫌いの人を仏法好きにする」のは難しいことではあつても、先ほどの我が家の犬のことを思い出すと、手をこまねいているわけにはいきません。そこでたとえば、一番直接的なのがお説教です。しかし仏法嫌いの人がお説教を聴くはずがありません。「お念仏はありがたい」と何度も同じことを言つても、嫌いな人が耳に入れてくれるはずがありません。でも何かあるはずです。

テレビや新聞、電車の中のコマーシャルを見てもいろんなのがあります。一つのことを広げるのに内容こそ違いますが、皆苦勞しているのです。皆が

お念仏を独り占めにしていませんか？

苦勞していること自体、私たちも苦勞しなければならぬという励みになりますし、お念仏のコマーシャルのための参考になりそうなものもあります。身の回りにいくらでもヒントがあると思います。

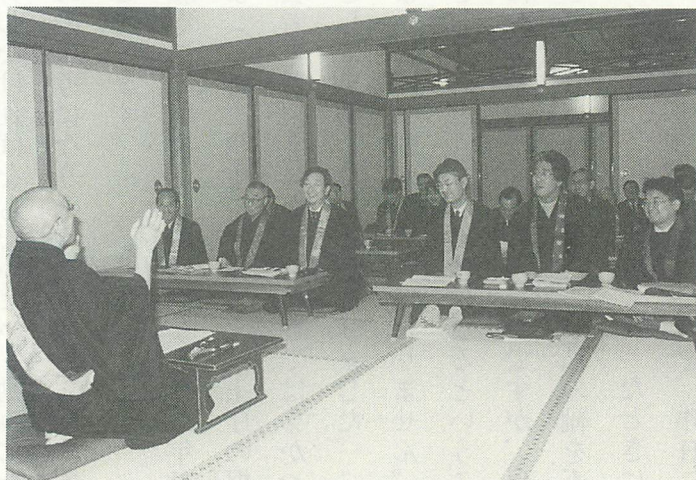
今年（平成一二年）はお西（西本願寺）の前裏さまが亡くなられた年です。ずいぶん前のことで、お西の前門さま（当時ご門主）がローマ法王庁の枢機すうき卿きやうに講演をご依頼になり、各派の代表者をお招きになったときではなかったかと思いますが、先代（父）の代理として出席したことがありました。

お西は東と違って、お御堂とお住まいの間に廊下がついておりません。これは昔からの伝統で、雨の時は傘をさしてお御堂にご出仕になるということ。その時に私も皆さんとご一緒にお御堂のほうへ行つたのですが、帰りがけに石畳に降りようとしたとき、さっとお裏さま（当時）が私の靴を直そうとされ、「あつ、そんなことをしてくださっては……」と言つたときには、既に遅しでした。恐縮至極、穴があつたら入りたいと思つたのを、昨日こと

のように覚えております。

私のような目下めしたの者に対するおもてなしから、そのお人柄に敬服してしまいました。お人柄に好感を持たば、その方の信ずる教えは間違いないと思えてくるはずです。わかりやすく言う、「坊主憎けりや袈裟けさまで憎い」の逆です（笑）。

この例を参考にさせていただきましよう。ここにおいでになるそれぞれの方のお人柄に惚れた人は仏法に近づくことになります。



しゅにえ けごん  
修二会に参拝して華厳声明の講義を聴く  
大谷声明研修会のメンバー（奈良・東大寺）

お念仏を独り占めにしていませんか？

## 必ずできることがある

仏法に無関心な人、嫌いな人を仏法のほうへ近付けること、向いてもらうこと。これが自信教人信です。お念仏を喜ぶ者の努めです。

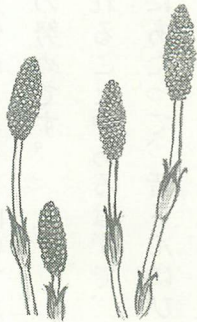
ちよつと気を付ければ、どなたにでも必ずやれることがあるはずで、お念仏を称えながら考えてください。今年の報恩講にあたって、皆さんにひとつの注文をいたしました。

ここで、『蓮如上人御一代記聞書』ききがきの一節を引用してお話を終わります。

「自分では文字が読めない人でも、人に読ませるように仕向ける人は、お聖教しょうぎょう（仏教の經典の尊称）を読んでいるのと同じである。」という趣旨のお示しです。

一、蓮如上人仰せられ候ふ。聖教よみの聖教よまずあり、聖教よまずの

聖教よみあり。一文字をもしらねども、人に聖教をよませ聴聞ちようもん（心を傾けて聞く）させて信をとらすは、聖教よまずの聖教よみなり。聖教をばよめども、眞実によみもせず法義（仏法）もなきは、聖教よみの聖教よまずなりと仰せられ候ふ。自信教人信の道理なりと仰せられ候ふこと。





## あとがき

みめぐみの刊行委員会

第一話は『第9部』（昨年二月発行）に引き続き、寺院や門徒宅という枠から離れて他団体へお出かけになられた中から、今回は神戸市インナー第四工業団地の新年研修会での御講演に加筆して頂きました。いつもながら大谷光道台下がお気軽になりました身近な事柄を難解な仏教用語を用いず、分かり易く説いて下さり、当日会場におられた方々も大変感銘しておられました。

なお、先日『みめぐみの』を初めて手にされた方から「住職さんがお正月参りにいらした時、ただいて読ませていただきました。良く理解も出来ませんがこれから余生を送るのにいい話だと思ってお便りした次第です。どこに申し込めば定期購入できますか？」との質問が寄せられました。

お申し込みは、本書巻末（奥付）に記されている「みめぐみの刊行委員会」までご連絡下されば、購入できます。

今回は、「読者の頁」を休載しました。次回には、皆様から寄せられた質問にもお答え頂きたく思いますので、折り込みはがきをご利用頂き「意見・感想」を含め、ふるってお寄せ下さい。

みめぐみの 第12部

---

2001年3月5日 印刷  
2001年3月10日 発行

定価 200円

著 者 大谷光道

発 行 みめぐみの刊行委員会

〒600 京都市下京区烏丸通七条上ル常葉町754  
-8167 本願寺寺務所内

TEL.075(351)3555 FAX.075(351)3120  
振替口座 01060-5-56990

印 刷 (株)中外日報社

---





みめぐみの刊行委員会刊